

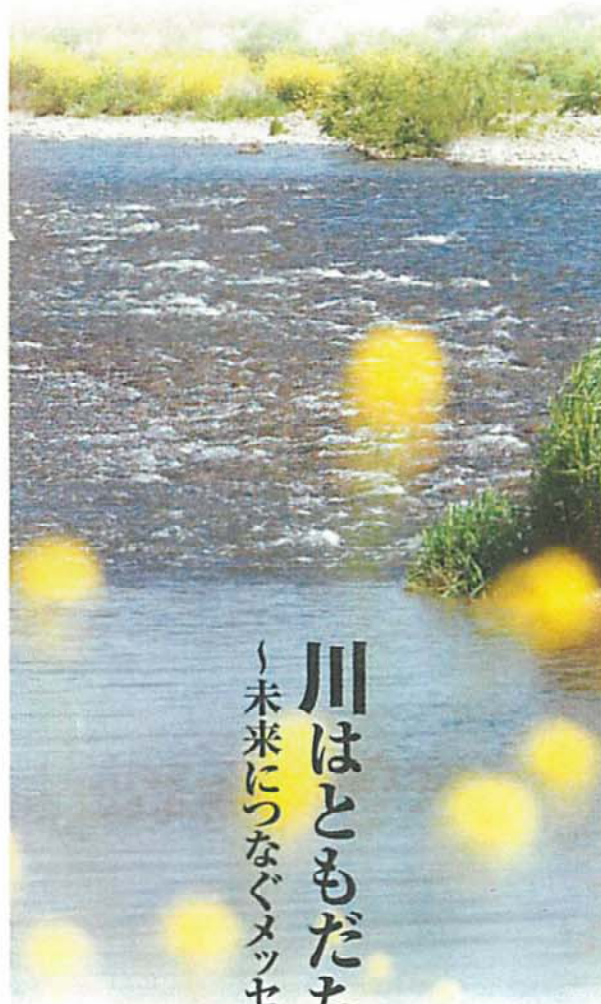
第19回 全国川サミット in 加古川

川はともだち ～ 未来につなぐメッセージ ～ 

報告書



全国川サミット連絡協議会



川はともだち
未来につなぐメッセージ

第19回 全国川サミット in 加古川

発行 第19回全国川サミット in 加古川実行委員会
〒675-8501 兵庫県加古川市加古川町北在家 2000
加古川市下水道部治水対策課内
TEL : 079 (427) 9246
FAX : 079 (427) 9285
E-mail : kasen@city.kakogawa.hyogo.jp

目次

I 開催概要	1
1) 全国川サミットとは	1
① 参加自治体	1
② 全国川サミットのこれまでの開催地	1
2) 加古川市開催の意義	2
II 実施内容	
1) 9月25日(土) - 第1日目 -	
① 全国市町村交流レガッタ及び加古川大堰視察	3
② 全国川サミット記念植樹	4
③ 全国川サミット連絡協議会総会	5
④ 首長サミット	6
2) 9月26日(日) - 第2日目 -	
① 開会行事	9
② 参加自治体紹介	10
③ 絵画・標語コンクール表彰式	20
④ アトラクション&DVD上映	21
⑤ 記念講談～旭堂南海氏	22
⑥ 基調講演～玉岡かおる氏	25
⑦ 事例発表	28
加古川交流研究会	28
加古川市立加古川中学校	29
西脇市立日野小学校	31
加東市立東条東小学校	32
⑧ サミット式典	34
⑨ 展示等	36
III 第19回全国川サミット in 加古川を振り返って	38

I 開催概要

1) 全国川サミットとは

一級河川と同じ名称または一級河川の流域にある全国の自治体が、「全国川サミット連絡協議会」を組織し、川がもたらす恵みや人々との関わりを生かしながら、川と共存するまちづくりを進めることを目的に、加盟自治体が持ち回りで開催しています。

平成4年富山県庄川町（現砺波市）で第1回サミットが開催され、今回で19回目となりました。

① 参加自治体

〈全国川サミット連絡協議会〉

秋田県横手市、茨城県取手市、群馬県みなかみ町、東京都江戸川区、新潟県長岡市、岐阜県揖斐川町、岐阜県白川町、兵庫県たつの市、兵庫県猪名川町、兵庫県加古川市

〈加古川流域自治体〉

兵庫県高砂市、兵庫県三木市、兵庫県小野市、兵庫県加東市、兵庫県西脇市

② 全国川サミットのこれまでの開催地

回数	開催地	テーマ
第1回	富山県庄川町	川は未来に夢はこぼ
第2回	北海道鶴川町	きらめきリバータウン ～川と人の未来を求めて～
第3回	静岡県大井川町	夢と希望あふれる川づくり ～川は命、未来の子供たちへ引き継ごう～
第4回	兵庫県加古川市	川はともだち ～ひと・まち・川 ちょっと素敵な物語～
第5回	徳島県那賀川町	未来へ語ろう！ 私たち川家族
第6回	秋田県雄物川町	川がつなぐ「ひと・まち・こころ」
第7回	宮城県北川町	思い出いっぱい 不思議がいっぱい ～川を彩るホタルの光が子供たちへの贈り物～
第8回	愛媛県肱川町	21世紀へのメッセージ ～それは川から始まる～
第9回	三重県宮川村	川に愛される人になりたい ～ちょっと素敵な川家族～
第10回	兵庫県揖保川町	歴史に学び明日を見つめる川づくり ～ともに創ろう 川の未来 水の未来～

回数	開催地	テーマ
第11回	東京都江戸川区	暮らしにとけ込む、にぎわいの川 ～都市の中の川を考える～
第12回	岡山県加茂川町	森と川が伝える ふるさとのメッセージ ～水は生命の源～
第13回	奈良県十津川村	みんなで考えよう！ 河川環境
第14回	兵庫県猪名川町	清流とともに暮らす ～ええやん猪名川50年～
第15回	岐阜県揖斐川町	川面に暮らし 川とせもに生きる
第16回	東京都江戸川区	川の恵みとその脅威
第17回	群馬県みなかみ町	川を活かしたまちづくり・川と交流
第18回	秋田県横手市	川がはぐくむ「ひと・まち・こころ」 ～山と川のあるまちから～

2) 加古川市開催の意義

平成4年から始まった全国川サミットは、平成22年に19回目を迎え、兵庫県加古川市で開催されることとなりました。

加古川市は、旧加古郡の5カ町村（加古川町・神野村・野口村・平岡村・尾上村）が合併し、昭和25年6月15日に47,897人で兵庫県下11番目の市として市制施行され、昭和54年2月1日に志方町を編入して現在の市域となり、県下最大の一級河川「加古川」の水の恵みを受けて発展してきた都市です。

古くは江戸時代、山陽道の宿場町「加古川宿」として、本陣・陣屋が設けられ、高瀬舟の往来で賑わいました。現在、海岸線には、わが国有数の鉄鋼工場があり、播磨臨海工業地帯の一翼を担っており、内陸部には、伝統を生かした靴下・建具など特色ある地場産業が営まれています。

また、まちの玄関口ともいえるJR主要駅周辺では、鉄道高架事業など再開発により都市機能の充実を図る一方、国宝・重要文化財を多数所蔵する鶴林寺などの神社仏閣や手軽な登山が楽しめる高御位山などを保全し、文化や自然との調和もあわせた「ひと・まち・自然がきらめく清流文化都市」の実現に向け躍進しています。

市制60周年記念事業でもある今回の全国川サミットは“川はともだち ～未来につなぐメッセージ～”をテーマに、全国の自治体からの参加者と市民が、川と地域の係わりや川との共生について考え交流を深めることを目的としており、加古川流域において共に発展し、住民生活や産業・文化の面で関係の深い高砂市・三木市・小野市・加東市・西脇市の参加のもと開催しました。

II 実施内容

1) 9月25日(土) - 第1日目 -

① 全国市町村交流レガッタ
及び 加古川大堰視察

市北部地域において、今回のサミットと合同開催で、同じく第19回目を迎える全国市町村交流レガッタ会場を視察、続いて加古川流域の治水と利水を担うため平成元年に設置された加古川大堰の視察を行いました。



↑
← 全国市町村交流レガッタ視察



↑
← 加古川大堰視察



② 全国川サミット in 加古川記念植樹式

全国川サミット in 加古川の開催を記念し、加古川大堰記念公園に参加自治体及び加古川流域自治体の代表者がクロガネモチ3本を植樹しました。



↑
← 記念植樹式



加古川大堰を背景に

③ 全国川サミット連絡協議会総会

加古川市加古川町の加古川プラザホテル2階「高砂・尾上の間」を会場に参加自治体の代表者が出席し、全国川サミット連絡協議会総会が開催されました。

以下の報告事項及び協議事項について審議され、すべて満場一致で承認されました。

なお、今後の全国川サミット開催予定については、平成23年度の第20回サミットの新潟県長岡市での開催が確認され、さらに第21回サミットを茨城県取手市で開催することが承認されました。



<次第>

会長挨拶 加古川市長 樽本庄一
来賓挨拶 国土交通省河川局
河川環境課長 中嶋章雅氏
兵庫県理事 中村健一氏

- 参加状況報告
- 議題

◇報告事項

- ・第1号 第18回全国川サミット in 横手
事業報告について
- ・第2号 第18回全国川サミット in 横手
収支決算について

◇協議事項

- ・第1号 第19回全国川サミット in 加古川事業計画（案）について
- ・第2号 第19回全国川サミット in 加古川収支予算（案）について
- ・第3号 第19回全国川サミット in 加古川共同宣言（案）について
- ・第4号 今後の全国川サミット開催予定について



④ 首長サミット

はじめに、国土交通省河川局河川環境課長中嶋章雅氏から、「最近の河川環境行政の話題」と題して講話をいただきました。ゲリラ豪雨に見られる豪雨災害の変化と地球温暖化が河川環境に与える影響など近年の河川の状況を踏まえ、国と地方が協働して実施する災害・水害サミットなどの河川環境施策と、治水、利水、環境の視点から総合的な河川管理の必要性についての説明がありました。

続いて参加の各自治体の代表者から、それぞれの自治体での河川に関する取り組みについて発表が行われました。主な内容は以下のとおりです。



国土交通省 河川局
河川環境課長 中嶋章雅氏

☆ 兵庫県加古川市 中田喜高副市長

古くから加古川は南北交通の大動脈として市民生活になくてはならない川です。平成元年に大堰が完成し、治水・利水・親水の各機能が飛躍的に伸び、安定的な取水により町が発展しました。今回当地で15年ぶりに川サミットを開催し、川と共に生きる素晴らしさを全国に発信していきたいと思っております。



☆ 秋田県横手市 照井康晴建設部長

昨年度、サミットへのご協力ありがとうございました。それ以降特別な取組はしていませんが、雄物川河川公園が東北管内で唯一、川の通信簿で5つ星を獲得いたしました。先達の方々の開墾で育まれた川を大切に、親しみやすい河川環境づくりに取り組みます。



☆ 茨城県取手市 藤井信吾市長

利根川舟運地域づくり協議会で座長を務め、平成20年度より川舟をつかった舟運の可能性を検証し、観光事業化するための取組をしております。

☆ 群馬県みなかみ町 鬼頭春二副町長

利根川源流でのラフティング、キャニオニングなどの体験が楽しめ、多くの若者が集まっています。今後とも川を通してのまちづくりを積極的に支援していきます。

☆ 東京都江戸川区 土屋信行土木部長

江戸川区はこのサミットを、第11回は江戸川、第16回には荒川をテーマに開催させていただきました。江戸川区は全国ゼロメートル地帯に住む人口が多く、雨が降らなくても洪水が起きる自治体ですが、水害を恐れるばかりだけでなく水路を親水緑道に作り変えたりして、水辺に楽しむ街づくりも進めています。



☆ 新潟県長岡市 小野塚進副市長

長岡市内には日本一の大河信濃川が流れ、その幅約1kmの河川敷を活かし、観覧客88万人規模の花火大会を開催しています。また、大河信濃川は越後のこしひかりや銘酒等、地場産業を支える大きな母親ということにもなると思います。昨年6月の水害で破堤したところの災害復旧工事も完了し、隣のまちと凧揚げ合戦をしたり、小学生による河川清掃や水辺の授業を通して市民が心から川に親しめるよう、行政の1つの柱として、人と川との豊かなふれあいの創出に取り組んでいます。

☆ 岐阜県揖斐川町 宮川康太郎会計管理者

清流揖斐川を後世に引継ぐため、小学生からお年寄りまで住民一丸となって、河川清掃や食用油の回収といったボランティア活動を行い、環境破壊の軽減に取り組んでいます。また、日本一の貯水量を誇る徳山ダムが完成し、水力発電による動力供給と流域47万人の生命を守る治水が可能となりました。今後はダム湖と周辺の森林が織りなす美しい観光・環境学習拠点として、活用していきたいと思っております。



☆ 岐阜県白川町 鈴木寿一参事

白川町は飛騨川の河川清掃を実施し、河川環境の保全に努めています。その清流を活かして鮎の放流、錦鯉の品評会など川に親しむ事業をする一方、ラフティングで小学生に川くだりを楽しんでもらったり、10人乗りのイーボートによる大会を開催して、流域市町村との交流を図っています。

☆ 兵庫県たつの市 田口隆弘副市長

たつの市では、揖保川いかだ下り大会や和太鼓演奏との競演による花火大会の実施、様々なスポーツが行われる河川敷公園の整備など、市民の交流場作りを推進しています。また、揖保川増水時には、自宅の畳を持ち寄る畳堤という60年以上前に考えられた水害対策が現在も残っており、畳堤訓練・水防フェスタには多くの市民が参加し、住民自身の手による防災自治意識が定着しています。

☆ 兵庫県猪名川町 福田長治町長

第14回サミットの猪名川町開催を契機に清流を取り戻そうという住民運動が行われています。川を美しくするためには、まず、山から始める必要があります。住民の皆様とともに里山の再生に取り組む一方、清流猪名川を取り戻すために流域市町村との同盟により環境保全運動を推進しています。



☆ 兵庫県高砂市 登幸人市長

加古川の豊富な水と遠浅な海岸という地理的条件もあり、明治以降、臨海部に大きな工場が進出し、播磨臨海工業地帯の中核都市として現在に至っています。市域内の一級、二級河川改修事業は進んでいますが、高砂市が管理する準用河川、普通河川の雨水対策の充実に課題として意識しながらまちづくりを進めていくつもりです。

☆ 兵庫県小野市 蓬萊務市長

小野市は加古川改修期成同盟会の会長市を務めております。市民参画による桜のオーナー制度により、西日本最大級の桜堤が整備され、ウォーキングなどに利用される親水空間となっています。国土交通省の方には小野桜堤街道支援についてのお礼とともに、無堤地区の予防的な治水対策をお願いいたします。



☆ 兵庫県加東市 安田正義市長

加東市には戦後初めて築造された国営の加茂川ダムと大川瀬ダムがあり、水と緑に親しめる町だと思っています。景勝地である闘竜灘では毎年5月に鮎祭りが、8月には加古川川遊びフェスタが開催され、市民のみならずには様々な形で川と親しんでもらっています。

☆ 兵庫県西脇市 來住壽一市長

西脇市の地場産業である播州織は川の恵みを受けて発展してきました。染色織物から出る汚水を住民会議により問題提起し、今ではきれいな川が保たれています。川辺では七夕、灯笼流し等の伝統行事が行われ、何世代もの住民による地域交流事業となっています。



以上のとおり、各自治体の代表者からは川とまちづくりに対する発表があり、これを受けて、国交省河川局河川環境課長中嶋章雅氏から河川行政を司る立場でのアドバイスが送られ、中身の濃い意見交換となりました。

2) 9月26日(日) -第2日目-

第19回全国川サミット in 加古川

会場：加古川市民会館

参加者：1,100人

① 開会行事

- ・ 踊っこ演舞 (踊っこまつり振興会「舞ええ華」、「麗舞」)
- ・ 歓迎挨拶 加古川市長 樽本庄一
- ・ 来賓祝辞 国土交通省近畿地方整備局河川部長 尾澤卓思氏
- ・ // 兵庫県理事 中村健一氏



樽本加古川市長



近畿地方整備局
尾澤河川部長



兵庫県中村理事



↑
オープニング
踊っこまつり振興会 →




② 参加自治体紹介



全国川サミットに参加した15の自治体の「川の恵み」をスクリーンで紹介後、各自治体の代表者が、それぞれのまちの特徴や独自の取り組みについて発表しました。




1 秋田県 横手市 (よこてし)

 <p>横手の冬の風物詩「かまくら」</p>	<p>(概要) 秋田県の南部に位置する横手市は、平成17年10月の8市町村合併により秋田県下第2位の都市となりました。新横手市誕生から5年が経過し、行事の共同開催、各種行政サービスの便宜拡大と統一化などにより、市民の間には一体感が確実に醸成されつつあります。流域面積全国13位の「雄物川」の流域に発達した横手市は、水の恵みに彩られた町でもあります。代表的な冬の祭りがまくらは、水神様を祀ります。東北有数の豪雪は、春には雪解け水となって田畑を潤し、人々の生活を支えてきました。横手市は「豊かな自然・豊かな心・夢あふれる田園都市」を将来像に掲げ、生活基盤整備に力を注ぐ一方、麴を中心とする発酵文化を守り育て、「食と農からのまちづくり」を進めています。昨年開催された第4回B-1グランプリでは「横手やきそば」がゴールドグランプリを受賞し、新名物として全国的にも注目を集めています。</p>
 <p>横手川蛇の崎橋・蛇の崎川原</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1) 城下町横手市の市街地は、雄物川の支流である横手川を中心にまちが形作られました。17世紀には横手川をはさんで武家の住まいである内町と町人の町屋が並ぶ外町が形成され、現在も当時のまち並みが多く残っています。蛇の崎橋と蛇の崎川原は市街地の中心にあり、市民の憩いの場として整備され、夏の送り盆祭りやねむり流し、さらには、市民団体が桜の植樹や紫陽花回廊づくり、国産の線香花火を体感する全国線香花火大会の開催など川とのふれあいを進める活動を行っています。</p>
 <p>雄物川河川公園</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2) 雄物川河川公園は、河川敷に整備された約20haの親水公園で、1周2.1kmの舗装路ではインラインスケートやジョギング、また、せせらぎ水路では水遊びやカヌーを楽しむことができます。広大な芝生広場に水道やトイレ、遊具も整備されておりキャンプやグラウンドゴルフ・砂遊びなど、幼児から高齢者まで多くの利用者でにぎわっています。国土交通省による河川敷公園などの水辺の親しみやすさを一般の利用者が評価した「川の通信簿」では、東北で唯一、最も高い五つ星(すばらしい)を獲得しています。</p>

2 茨城県 取手市 (とりでし)


 <p>利根川小堀の渡し</p>	<p>(概要) 平成17年3月に、取手市と藤代町が合併し、人口113,000人の新生「取手市」が誕生しました。取手市は、茨城県の南端に位置し、東西9.3km、南北14.4kmであり、利根川とその支流である小貝川の二大河川が流れる水と緑に恵まれた地域です。茨城県の南部の玄関口としてばかりでなく、東京、成田、つくばを結ぶ三角形のほぼ中央に位置していることから交通の要となっており、首都圏の都市の中でも、交通の利便性と自然環境に恵まれた都市環境をもっています。都市の将来像として定めた「水と緑を育み、美と文化を創る活き活きリビングタウン」の実現に向け、大胆な発想と創意工夫をもって活気あるまちづくりの創造に取り組んでいます。</p>
---	--

 <p>小堀の渡し</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1)</p> <p>明治末期の利根川大改修工事の結果、千葉県側になってしまった小堀地区の住民たちが、大正3年から自分たちの手で渡しを始めました。昭和42年から市営になり、今では一日7便、常時運行している渡し船です。また、かつて小堀住民の足として運行していた渡しは、現在、観光客やサイクリングを行う人の利用が多くなっています。近年、新設の栈橋ができたことから、3点間を結ぶ渡しとして、1運行経路100円で誰でも乗船できます。</p>
 <p>とりで利根川大花火</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2)</p> <p>昭和5年、国道6号利根川大橋の開通を記念して始まった伝統の花火大会。雄大な利根川の夜空を彩る七色の光と音の祭典です。毎年、利根川の広い河川敷には、市内外から10万人の見物客が訪れ、利根川に映える花火の美しさに見とれます。今年も57回大会が8月14日の土曜日に開催されました。その他、河川空間を利用した河川まつり(10月)やどんどまつり(1月)、小貝川の河川空間ではフラワーカナル(5月)なども開催されます。</p>


<h3>3 群馬県 みなかみ町 (みなかみまち)</h3>	
 <p>谷川岳一ノ倉沢</p>	<p>(概要)</p> <p>みなかみ町は、峻嶒谷川岳をはじめとする上越国境の山々に抱かれ、その雄大な自然から生命の水と豊富な温泉が滾々と湧き出ずる「水と森を育む利根川源流の町」であり、首都圏の水瓶として利根川流域3,000万人の生命と暮らしを支える重要な責務を担っています。日本一流域面積の大きな川「坂東太郎(利根川)」と赤谷川の河岸段丘に沿って発展してきたみなかみ町。谷川岳の「一ノ倉沢・マチガ沢」に代表されるような国内第一級の山岳地や森林、風がそよぎ清らかな水が流れ、虫が舞う美しい田園、町内各地に湧き出る豊富な温泉などの大自然を地域の資源として活かしつつ、水源の地に住む私たち町民一人ひとりが「環境力」を身につけ、環境保全の責務を果たすことをめざして『みなかみ・水・「環境力」宣言』をしています。</p>
 <p>月夜野大橋より谷川岳を望む</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1)</p> <p>みなかみ町は、日本一の流域面積を誇る坂東太郎(利根川)が町の中央を流れ、その源は群馬、新潟両県の県境大水上山に発しており、まさに「利根川源流のまち」です。町名は、若山牧水の「みなかみ紀行」から命名されました。水と森を育むまち「みなかみ」は、「水」の故郷として、また、首都圏3000万人のこころの「ふるさと」として親しまれ、町民一人ひとりが誇れるようなまちづくりを進めています。</p>
 <p>ラフティング</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2)</p> <p>最近ではアウトドアスポーツが盛んになり、利根川では、激流をゴムボートで下る「ラフティング」、川版ボディボードの「ハイドロスピード」や澄んだ清流の沢を下る「キャニオニング」などの体験が楽しめ、シーズンには多くの若者が集まっています。また、日本リバーベンチャー選手権大会の全国大会が開催されており。</p>


<h3>4 東京都 江戸川区 (えどがわく)</h3>	
 <p>江戸川区全景</p>	<p>(概要)</p> <p>江戸川区は東京都の東端部に位置し、西に荒川、東に江戸川など7つの一級河川と海に囲まれた水辺環境の豊かなまちです。全国の親水公園の先駆けとなった古川親水公園をはじめ、区内には総延長27kmの親水公園、親水緑道が流れ、潤いのある快適な都市空間を実現しています。その豊かな水辺を舞台に、住民、区、河川管理者が一体となって、川とのふれあいや自然環境の保全、創出に努めています。さらに、災害に強い江戸川区を目指し、平成20年には、「海拔ゼロメートル世界都市サミット」を開催するなど、区民の皆さんと協働でスーパー堤防整備にも積極的に取り組み、安全で安心なまちづくりを進めています。</p>
 <p>荒川スーパー堤防</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1)</p> <p>江戸川区は、江戸川・荒川及び東京湾に面する、三方を水に囲まれた低平地であり、かつての地下水汲み上げによる著しい地盤沈下により、区陸域の7割がゼロメートル地帯となっています。こうした地勢から、洪水や高潮から街を守るために、沿川のまちづくりとともにスーパー堤防整備を推進しています。</p>
 <p>新川千本桜</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2)</p> <p>新川は、江戸川区の中央を東西に流れる全長3kmの一級河川です。かつての新川は、千葉県行徳の塩を、また、東日本諸国からの様々な物資を江戸市中へ運ぶ重要な水運路として、江戸時代から人々の生活に深く関わってきました。その歴史ある新川に千本の桜を植え、木橋や火の見櫓などの江戸情緒あふれる景観づくりを区民とともに進めています。</p>


<h3>5 新潟県 長岡市 (ながおかし)</h3>	
 <p>米百俵の群像</p>	<p>(概要)</p> <p>長岡市は、日本一の大河・信濃川が市内中央をゆったりと流れ、市域は福島県境近くの守門岳から日本海まで広がる人口28万人のまちです。平成17年度に9市町村と、平成21年度に1町と合併し、長岡まつりや山古志の牛の角突き、寺泊の海の恵み、四季折々の自然など、個性ある11の地域の魅力が輝いています。平成16年の中越大地震をはじめとした相次ぐ災害にも、「米百俵」の精神を受け継ぐ市民の力で復興を成し遂げました。長岡市は、総合計画で定めた「前より前へ！長岡 人が育ち地域が輝く」を合言葉に、「市民力」「地域力」そして「市民協働」の力を活かし、シティホールプラザ「アオーレ長岡」、「子育ての駅」など全国にさががけたまちづくりを進めています。</p>
 <p>信濃川桜つつみ</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1)</p> <p>日本一の長さを誇る大河・信濃川が、長岡市の中央を南北に流れており、長岡市を中心とする新潟県中越地方における産業を支え地域文化を育むとともに、市民の憩いの場となっています。現在、市内の蓮潟地区では桜つつみのほか、堤防の緩傾斜化や遊歩道の整備が進んでおり、春は桜のお花見スポット、夏は花火大会の会場として、また散策やジョギングのコースとして、子供からお年寄りまで多くの市民から親しまれています。</p>

 <p>長岡まつり大花火大会</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2)</p> <p>信濃川を会場として8月2日、3日に開催する長岡まつり大花火大会は、2日間で2万発もの花火が打ち上げられ、「日本一の花火大会」として全国各地から約90万人が訪れます。今年も正三尺玉やナイアガラ大スターメイン、震災復興祈願花火フェニックス、NHK大河ドラマ「天地人」から生まれた天地人花火などが打ち上げられ、観客の皆さんから大いに喜んでいただきました。</p>
---	---


6 岐阜県 揖斐川町 (いびがわちょう)


 <p>徳山ダム</p>	<p>(概要)</p> <p>岐阜県揖斐郡揖斐川町は、岐阜県の最西部に位置し、北側は福井県、西側は滋賀県と接し、揖斐川町の南西部から北西部にかけては、標高1,100~1,300m前後の山々がそびえ、その山間を縫うように揖斐川が流れます。また、揖斐川町の南東部は、濃尾平野の最北端に位置する平坦地となっており、市街地及び田園地帯となっています。日本最大の総貯水量を誇る徳山ダムは、水力発電による電力供給と治水の重要な役割を果たすとともに、日本一美しいといわれるダム湖が、観光拠点として期待されています。揖斐川により生み出される自然資源は、下流域の水源であるとともに、人と自然との共生が求められる21世紀の貴重な地域空間となっています。</p>
---	--


 <p>ありがとう花火</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1)</p> <p>『夢は大きく、デカイ花火見るならいびがわ』 ～尺玉打上げ数県下最大級～</p> <p>古くから当町に伝わる「かっぱ伝説」と「水神まつり」を元に開催されるこの花火大会は、ただの花火大会ではありません。願い事や、揖斐川への感謝の気持ちをメッセージシールとして募集し、花火玉に貼って打上げることから、「ありがとう花火」と呼ばれています。みんなの夢や思いがたくさん詰まっているため、ナイアガラ、スターメインなど派手な仕掛け花火をはじめ、県内で数箇所ではしか打上げ出来ない大きな花火(尺玉)が、次々と打ち上げられ、地鳴りする爆音と、夜空に咲き続ける大輪の華が見る人を魅了します。</p>
--	---

 <p>いびがわマラソン</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2)</p> <p>愛知県、岐阜県、三重県の東海三県で初の日本陸上競技連盟公認のフルマラソンコースを使用した市民マラソン。毎年11月開催し10,000人のランナーでにぎわいます。紅葉が美しい山々、そして眼下には、清らかで美しい揖斐川、この両方を楽しみながら走る自然に恵まれたマラソンコースは、全国各地から集まる多くのランナーから大変好評で、「2008全国ランニング大会100撰」では総合3位に選ばれました。いびがわマラソンでは、「おもてなしの心」に加え、「おかげさま=感謝の心」を大切にして、より多くのランナーをお迎えしています。</p>
---	--


7 岐阜県 白川町 (しらかわちょう)



 <p>土木遺産「白川橋」</p>	<p>(概要)</p> <p>とびっきりの清流と豊かな緑が自慢の白川町。近年、美しい自然を生かした観光・レクリエーションとして脚光を集めています。また、豊かな山林資源を生かした木材産業や山間に流れる清流が生み出す独自の気候風土を生かしたお茶の栽培が盛んです。白川町は名前のとおり川に恵まれた町であり、代表的な河川は白川・飛騨川・佐見川・黒川・赤川の5つです。また数多くの川にちなんだ行事やイベントが催されます。8月には夏休みを利用して親子で楽しみながら参加できる町内各河川の調査活動(カワゲラウォッチング)や9月には地域で共有できる貴重な財産である「飛騨川」にてEボート交流会を開催します。この交流会では飛騨川をEボートにより体感し、川を学び、川と遊びながら飛騨・木曾川を通じた地域連携を進め、交流を深めます。</p>
--	---

 <p>カワゲラウォッチング</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1)</p> <p>白川町は、自然豊かな地域で名前のとおり川に恵まれた町です。大小の河川がたくさんあり、毎年水生生物による河川の水質調査として「カワゲラウォッチング」を行っています。この事業は小中学生をはじめとする住民の参加を得て、身近な河川にすむ生物を調べることでより河川の水質の調査をするものです。本町の大切な財産である河川をいつまでも美しく保つことの大切さや重要性を伝えています。その他にも地域の「川を守る会」の方による清掃活動などが行われ環境美化の輪を広げています。</p>
---	--

 <p>飛騨・木曾川Eボート交流会</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2)</p> <p>白川町には大小の河川がたくさんありますがそのうち代表的な河川は白川、飛騨川、佐見川、黒川、赤川の5つです。その中の飛騨川では、9月にEボート交流会を開催します。この交流会では地域で共有する貴重な財産である「飛騨川」をEボートにより体感し川を学び、川と遊びながら飛騨・木曾川・伊勢湾を通じた地域連携を進め、交流を深めています。</p>
--	---

8 兵庫県 たつの市 (たつのし)



 <p>播磨科学公園都市 SPring-8</p>	<p>(概要)</p> <p>たつの市は、南北に流れる揖保川と瀬戸内海の恵みを受けて発展してきました。当地域は揖保川を軸として、北部の山々や原生林・鶏籠山などの豊かな緑と、瀬戸内海国立公園にも属する関西随一の遠浅海岸・新舞子浜、梅林など豊かな自然資源があります。また、国指定史跡の新宮宮内遺跡、龍野城と脇坂藩5万5千石の城下町に連なる古い町並み、国指定重要文化財の永富家住宅等の建築物、国指定重要文化財の賀茂神社、江戸時代に海の宿駅として栄えた室津港など歴史的資源も豊富に有する一方、北西部には世界最高性能の大型放射光施設SPring-8(スプリングエイト)に代表される播磨科学公園都市の整備が進められ、これらの資源を生かして「自然と歴史と先端科学技術が調和し一人ひとりが輝くまち」の実現に取り組んでいます。</p>
--	--

 <p>揖保川いかだ下り大会</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1) 揖保川を約2km下る「揖保川いかだ下り大会」は、小中高校生をはじめとして、県外からも参加をいただいております。参加者は、工夫を凝らした手作りいかだに乗り込み、夏の日差しのもと満喫したいかだ下りを楽しまれています。</p>
 <p>龍野納涼花火大会</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2) 清流揖保川の河川敷において、約2,000発の花火が夜空を彩ります。和太鼓演奏との共演によるメロディー仕掛け花火や、全長120mの「揖保川清流の滝」などが観客の目を楽しませてくれます。また、今年は第60回大会を記念して、満60歳の方を対象とした還暦パワーオンステージを開催しました。</p>

<p>9 兵庫県 猪名川町 (いながわちょう)</p>	
 <p>清流猪名川を取り戻そう町民運動 いなぼう マスコットキャラクター いなぼう</p>	<p>(概要) 猪名川町は、兵庫県の南東部に位置する昭和30年4月に誕生した町です。昭和50年代から町南部を中心に大規模な住宅開発が進み、大阪市内まで電車で約40分という地理的条件から阪神地域のベッドタウンとして発展しました。町の最北部には、猪名川の源流である標高753mの大野山があり、豊かな自然と都市機能が調和したまち並みが魅力の一つです。木喰明満上人が逗留した地で仏像を奉納した木喰仏は、明満上人最晩年の円熟した作で、微笑仏と呼ばれ親しまれており、また国の重要文化財の戸隠神社や、豊臣政権の台所を支え、奈良大仏鑄造に銅を献じたという伝承もある多田銀銅山などが今も残り、国土交通省の歴史街道モデル事業の対象地区に認定されるなど、歴史ロマンに彩られた町です。平成17年に「全国川サミット in 猪名川」を開催し、町名にもなっている猪名川を「清流猪名川」として子どもが安全に遊べる川、誰からも親しまれる川にしようと住民主体の「清流猪名川を取り戻そう町民運動」に取り組んでいます。</p>
 <p>大島であい親水公園</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1) 猪名川の河川敷には、3箇所の親水公園が整備されており、憩いと安らぎの場として、夏休みなど休日には町内外から多くの家族連れが「川遊び」に訪れる人気のスポットになっています。</p>
 <p>屏風岩</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2) 猪名川渓谷自然公園の清流に高さ30m、幅100mにおよぶ岸壁が、屏風のようにそそり立ちみごとな景観をつくり出していることからその名がつけられた奇石。日没後のライトアップが幻想的な雰囲気を醸し出します。屏風岩の周辺は豊かな緑に包まれ、春には桜、夏は蛍、秋は紅葉、冬は雪と、自然が織りなす四季折々の姿を見ることができます。町の自然と調和した文化を象徴するかのよう、猪名川の清流に静かにたたずんでいます。</p>



<p>10 兵庫県 加古川市 (かこがわし)</p>	
 <p>国宝鶴林寺山門及び三重塔</p>	<p>(概要) 加古川市は、県下最大の一級河川「加古川」の水の恵みを受けて発展してきた都市で、2010年に市制60周年を迎えます。古くは江戸時代、山陽道の宿場町「加古川宿」として、本陣・陣屋が設けられ、高瀬舟の往来でにぎわいました。現在、海岸線には、わが国有数の鉄鋼工場があり、播磨臨海工業地帯の一翼を担っています。内陸部には、伝統を生かした靴下・建具など特色ある地場産業が営まれています。また、まちの玄関口ともいべきJR加古川駅や東加古川駅周辺では、鉄道高架事業など再開発により都市機能の充実を図る一方、国宝・重要文化財を多数所蔵する鶴林寺などの神社仏閣や手軽な登山が楽しめる高御位山などを保全し、文化や自然との調和もあわせた「ひと・まち・自然がきらめく清流文化都市」の実現に向け躍進しています。</p>
 <p>水管橋</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1) 加古川の水の恵みにより、古くは播磨国風土記にも地名が見られるように、当地は播磨地域の中心地として栄え、江戸時代には本陣・陣屋を利用する旅人の往来により、加古川を渡す高瀬舟の舟運で賑わいました。また、1日に約16万トン臨海部の工業地帯へ送水される加古川の水は、明治における産業の近代化とともに繊維業を振興、戦後には我が国有数の製鉄工場が立地し、鉄鋼業を中心に播磨臨海工業地帯の拠点都市を形成して復興を支えました。このように加古川の水の恵みは、今も加古川市のものづくりを育んでいます。</p>
 <p>漕艇センター</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2) 『兵庫県で一番大きな川、「加古川」』 まちの中央を流れるこの一級河川は、加古川市のシンボルとして市民に愛されています。また、河川敷にはテニスコートやグラウンドなどレクリエーション設備が整備され、加古川まつり花火大会やツーデーマーチ、市民レガッタなど、地域に定着した大型イベントにも広く活用されるほか、川をテーマに全国から公募する川の絵画大賞展の開催等、「ひと・まち・自然がきらめく清流文化都市」の実現に向け、さまざまなスポーツ・文化事業を展開しています。</p>

<p>11 兵庫県 高砂市 (たかさごし)</p>	
 <p>万灯祭</p>	<p>(概要) 「高砂やこの浦舟に帆をあげて・・・」と古くからめでたい謡曲「高砂」(世阿弥作)で知られる高砂市は、兵庫県南部播磨平野の東部に位置し、東に加古川が流れ、南に瀬戸内播磨灘を臨み、古くから白砂青松の風光明媚な泊として栄えてきました。西部の日笠山や中央部の竜山などの丘陵地には多くの遺跡が発見されており、原始・古代の人々の暮らしぶりをしのぶことができます。近現代になると大阪や神戸などの大都市に近いことや豊富な用水があること、埋め立てしやすい遠浅の海岸などが企業の立地条件となって、機械・製紙・化学・食品・電力などの大工場が進出し、播磨臨海工業地帯の中核となりました。市内には高砂神社・生石神社・鹿嶋神社・曾根天満宮・十輪寺などの社寺や石の宝殿などの史跡も多く、市内各神社の秋祭りなどの行事には多くの人々が訪れる観光地にもなっています。</p>

 <p>クリーンキャンペーン</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1)</p> <p>「日本の白砂青松 100 選」の一つに選定された県立高砂海浜公園は、加古川河口部に位置し、春から夏の水遊びをはじめ、四季を通して釣りや散歩の絶好の場所として人気があります。毎年7月にボランティアによる川と海のクリーンキャンペーンを行っており、“瀬戸内の生命(いのち) 育む川と海”をテーマに、誰もが参加しやすい活動で川と海の連携に取り組んでいます。</p>
 <p>高砂マラソン大会</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2)</p> <p>10万市民の健康増進と体力づくり、コミュニケーションを育てることを目的として「高砂マラソン大会」を開催しております。子供がたくさん参加していて、とても賑やかで楽しいです。コースは加古川マラソン大会の一部のコースを利用しての高砂側でのコースです。河川敷なので川沿いルート、川の音、草の音、鳥の鳴き声、景色を満喫しながら走れます。</p>

<p>12 兵庫県 三木市 (みきし)</p>	
 <p>美囊川の桜</p>	<p>(概要)</p> <p>三木市は、古い歴史と自然に恵まれ、播磨風土記には、億計(おけ)、弘計(をけ) 2皇子の古代ロマンの物語が記されています。また、戦国時代には、東播8郡24万石を領した別所氏の居城があり、三木合戦によって荒廃した町は、豊臣秀吉の復興策によって商工業が活発化し、今日の金物産業の発展の基礎をつくりました。吉川町との合併により、名実ともに山田錦(酒米)の主産地となり、三木金物ブランドとともに更に発展が期待されます。一方、市域内を中国及び山陽自動車道が通過するなど、全国的にも交通の要衝として注目され、数多くのゴルフ場が立地するほか、「グリーンピア三木」「三木ホースランドパーク」「山田錦の館」「吉川温泉よかたん」など、観光資源も多彩なものがあります。また、優れた交通立地を生かし、「県立三木総合防災公園」や「ひょうご情報公園都市」の建設が積極的に進められ、将来が期待される所です。</p>
 <p>リバーサイドパーク</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1)</p> <p>河川敷を活用したリバーサイドパークでは、市民がウォーキングや散歩、グラウンドゴルフ・ゲートボール等をされており、水辺空間を市民の憩いの場として多くの市民が活用されています。</p>
 <p>市民憩いの場</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2)</p> <p>三木市の中心部を流れる美囊川の堤防には、随所に桜が植えられており、春には桜の名所となっています。市民の憩いの場・ふれあいの場として活用されています。また、吉川町では、支流の北谷川両岸が3.8kmにわたり、桜並木となっています。近年は桜の名所として脚光を浴びています。</p>

<p>13 兵庫県 小野市 (おのし)</p>	
 <p>国宝浄土寺浄土堂</p>	<p>(概要)</p> <p>小野市は古来より交通の要衝に位置し、江戸時代には加古川の水運を最大限に活用した経済活動が展開され、加古川中流における物流と文化の中心地として栄えてまいりました。全国一の生産量を誇る「そろばん」家庭用刃物等の「金物」など、伝統産業に加え、医療、食品、電気等30の企業が進出する工業団地・流通業務団地が新都市を形成しております。また、文化・観光においては、重源上人が建立した大仏様式の国宝浄土寺浄土堂内阿弥陀如来三尊立像は、名仏師快慶の作品で有名であるとともに貴重な文化財が保存されており、歴史や伝統文化など貴重な財産を継承し、「人いきいき まちわくわく ハートフルシティおの」を掲げて、新たなまちづくりを展開しております。</p>
 <p>桜堤</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1)</p> <p>加古川の左岸、栗田橋下流より東条川の古川橋までの全長約4kmに渡る西日本最大級として、加古川の堤防強化を図るとともに、染井吉野や枝垂れ桜など5種類650本もの桜を植樹することで、貴重な水辺空間の環境整備を図り、生活の潤いと憩いの場の提供と併せて、「桜のオーナー制度」を取り入れ、参画と協働による新しい河川環境づくりを推進しております。</p>
 <p>水辺の楽校</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2)</p> <p>市場小学校北側を流れる山田川の多自然型河川改修により、子供たちが四季を通じて水辺の動植物を観察し、自然とのふれあいとともに、環境・景観を守るため、小学校、保護者、地域住民が一体となって取り組んでおります。そのなかで、「市場水辺の楽校推進協議会」を設立し、クリーンキャンペーンをはじめ、いちばふれあいの祭典等多種多様な行事を催行し、参画者が増え活性化してきました。</p>
<p>14 兵庫県 加東市 (かとうし)</p>	
 <p>大賀ハス</p>	<p>(概要)</p> <p>「滔々と流れる水と美しい緑が織りなす雄大なまち」そんな加東市は平成18年3月20日、社町・滝野町・東条町が合併し誕生しました。県立自然公園にも指定されている東条湖をはじめ、市内の中心部を流れる加古川と千鳥川・東条川など数多くの支流、2千年前の眠りから覚めた大賀ハスや市の天然記念物「ツクバネ」が自生するつくばねの滝、五峰山と見事な調和を見せる名勝闘竜灘。これらは加東の春夏秋冬を彩り、人々の心を和ませてくれます。市のキャッチフレーズである「山よし! 技よし! 文化よし! 夢がきらめく☆元気なまち 加東」をさらに充実していくため、農産物資源を活用した加工品開発、地域産業を含めた商工業の発展など、地域産業の振興と活性化への取り組みをはじめ、歴史的な資源や伝統産業、文化芸能の保存など、市民のふるさと意識の高揚を図る観光事業の振興にも力を注いでいます。また、多くの雇用と活力を生み出すため、大都市に直結する恵まれた交通網を生かした企業誘致を進めることで、さらに魅力的で活気あふれるまちづくりを進めています。</p>

 <p>閼竜灘</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1)</p> <p>加古川の中流にある閼竜灘は、川底が岩石できており、岩に阻まれた水流が激流や滝となって流れていきます。閼竜灘の名前は、江戸末期にこの地を訪れた詩人の梁川星巖（やながわせいがん）が、岩場を縫って流れる水流に二匹の竜が暴れる様子をイメージしたことから名付けられました。舟運の障壁となるこの閼竜灘では、江戸時代まで、上流と下流でいったん荷を下ろし、陸路を運んでから、再び舟で運搬していました。そのため、兩岸の村は物流の中継地として大いに栄えました。</p>
 <p>花まつり鮎まつり</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2)</p> <p>閼竜灘は、全国で一番早い5月1日に鮎漁が解禁となり太公望を楽しませてくれます。また、毎年5月3日には、加古川・閼竜灘で鮎まつりが初夏を告げるイベントとして開催され、閼竜灘独自の鮎の罾漁法が公開されます。また、地元小学生による稚鮎の放流などの各種イベントがあり、同じ日に、五峰山光明寺では花まつりが行なわれます。夜には花火が打ち上げられ、これらを総称して「花まつり鮎まつり」として市民に親しまれています。</p>

<p>15 兵庫県 西脇市 (にしわきし)</p>	
 <p>播州織工房館</p>	<p>(概要)</p> <p>西脇市は、東経135度と北緯35度が交差する「日本のへそ」に位置します。中央部を加古川が流れ、市域南部で杉原川・野間川と合流しています。これらの川や周辺の山々に囲まれ、良好な自然に恵まれたこの地域では、200年余りの歴史をもつ先染め綿織物「播州織」や伝統的工芸品「播州毛鉤」を代表とする「播州釣針」などの地場産業が発展してきました。「播州織」は国内生産量の約7割、「播州毛鉤」も国内生産量の約9割を占め、いずれも地域ブランドに認定されています。2005年10月には、隣接する多可郡黒田庄町と合併し、新「西脇市」が誕生しました。黒田庄町は、神戸ビーフの素牛となる「黒田庄和牛」の生産地として知られています。都市像を「人輝き 未来広がる 田園協奏都市」と掲げ、市民がいきいきと活動し、心の豊かさを実感できる個性あふれるまちづくりを目指しています。</p>
 <p>杉原川・岩滝</p>	<p>(川を生かしたまちづくり1)</p> <p>西脇市の中心市街地を流れる杉原川は、昭和62年、国から「ふるさとの川モデル河川」に指定され、やすらぎの水辺空間が整備されました。杉原川やその河川敷は市民の憩いの場となり、市民のウォーキングコースや子どもたちの遊び場としていつも親しまれています。自然を生かした岩滝も見る人の心を和ませてくれます。</p>
 <p>杉原川の灯籠流し</p>	<p>(川を生かしたまちづくり2)</p> <p>ふるさとの川モデル河川として整備された杉原川では、毎年、地域住民が中心となって盆の8月15日に先祖の霊を送る灯籠流しを行っています。夕刻になると河川敷に祭壇が設けられ、多くの家族連れが手作りの灯籠を持ち寄り、薄暗くなった頃、順に灯籠を流していく風景は幻想的な夏の風物詩となっています。</p>

③ 絵画・標語コンクール表彰式

本市を貫流する母なる川「一級河川加古川」の恩恵を再認識し、川への感謝、河川環境保全の推進をテーマに市内小中養護学校の児童・生徒による絵画・標語コンクールを実施しました。本サミットではその表彰式を開催、応募総数 絵画903点、標語442点の中より、優秀な成績をおさめた14名に対し、会長である樽本庄一加古川市長より表彰状と記念品が手渡されました。



会長より一人ひとりに表彰状を授与



絵画・標語コンクール表彰式 →



④ アトラクション&DVD上映

加古川流域を紹介するDVD上映のほか、様々なアトラクションが上演されました。



加古川流域紹介DVD上映



日岡保育園による「ひおかたるばやし」



加古川シティオペラによる合唱



加古川市立浜の宮中学校吹奏楽部によるブラスバンド演奏

⑤ 記念講談

- テーマ 「加古川神話物語 ～ ヤマトタケルの見た加古川 ～」
- 講談師 旭堂南海氏

加古川生まれ、加古川育ちの講談師、旭堂南海でございます。ま、講談師というのは、見ての通りの好男子ということで、。昨年、加古川観光大使を拝命いたしました時に名刺をいただきました。私がいろんな方と名刺交換をいたしますと、「ああ、加古川というのですか、きれいな川ですね。」と話が弾みましてねえ、一級河川ですよ、私の着物も今日は一級化繊でございますが、いや、まっぴりね、こらもう、川がきれいでございましてね。川があるんですよ。それ以外は？まあ、川で、ございましてね、、、と。ヤマトタケルのみた加古川。物語はこんなところから始まります。



第12代の皇(すめら)の命(みこと)。天皇でございます。このお方が景行(けいこう)天皇という人でございました。当時都は大和というところにあつたのでございますが、景行天皇もお年頃となり、お付きの家来、伊志治(いしじ)と申します。「皇の命様、いろいろとお妃の口がきてございますが、どなたがよろしゅうございますか？」と。いまひとつ気乗りがなさらなかつた景行天皇でございます。「伊志治よ。日ノ本というのは広いのう。どこかできれいな女性を探してまいれ！」家来の伊志治が半年たつて戻ってくる。「きれいな女性がおるのはどのあたりじゃ。」「さようございするな。北の方へ参りますと、秋田の横手というところが美しいそうございまして、関東は茨城のあたりが美しいという、それから新潟、岐阜の揖斐川のあたりが美しいと、」まあ、これだけ誉めておけば、もう、よろしいのではなからうかと、、、あとは、加古川でございましょうか？

当時は加古川という地名はなく、私が聞いたところによると、氷ノ川(ひのかわ)と書いたそうでございます。「氷ノ川の界隈には美しい方が、あまたいらっしゃるそうござります。」「ならば伊志治よ！参ろうぞよ、播磨の地へ！」播磨には美しい女性がいるとお聞きになり大阪まで出張つてまいります。淀川が流れているところで「伊志治、ここにも大きな川が流れておるのう。お前が諸国調べて参つたときの話では、大きな川が流れておるところの女性は美しいという話ではなかつたか？」「命に申しあげます。ここ難波の女性は若いうちは美しいかもしれませんが、少々、年長けてまいりますと、おばちゃんというものになつてまいりますと、豹柄の服を着たり、タイツを履いたりして恐ろしい限りでございます。」「なるほど、ここはやめておこう。さらに西へと参ろう。」と、明石の郡についた折に、「伊志治、ここには川は無いけれど、海があつて、また女性が美しいのではないか、」「なんの！明石の女というのは、もう、タコみたいな女が多い！」と、本日は明石の方はいらっしゃらないと聞いておりました、また明石へ参りましたときには、明石が一番！というお話をする予定になっております。

そして氷の川の近辺までやってまいりますと、「伊志治、あの平野のところに山があるのう。」「ほほう、標高60mに足りない大野山、ただいまの日岡山でござりまするなあ。」その山の上へと主従二人がお上りになりました時、「きれいなものじゃのう。日を見るにはここが一番の岡じゃのう。」と言うので「日岡」という名前がついたとも言われてございます。

また、ここを加古の地と申しますのは、景行天皇は、狩もお得意でございました、「伊志治、あそこに鹿の児がおるではないか。射るぞよ。」ギリギリギリと、今しも放とうとするその時、鹿の児が鳴いたそうでございます。思わず射ろうとしましたけれど、矢が下へと落ちたそうでございますね。「鹿の児（かのこ）は撃てぬのう。この地をば鹿児という名前をつければよかろう。」と。

さて、美しい女性はおらぬかと日岡の小高きところから小手を払って眺め下ろしておりますと、目の前を滔滔と流れております加古川の川辺のところに、年の頃ならば16~17とおぼしき女の人、「はて、あの女性は何？伊志治、見てまいれ！」言われて伊志治が「お名前をお聞かせくださいませ。」「印南別嬢（いなみのわけのいらつめ）と申します。」と、このあたりの豪族の娘様でござりました。印南別嬢様というお方を伊志治が無理から日岡の山の近くまで連れてまいって目合わせた。年が若い男と女、天皇がこう見る、印南別嬢がこう見る、見交わす顔とおもて。天皇思わずこのときに、「よき女子であるのう。」いずれが菖蒲か杜若、百花繚乱、咲き零れんばかりの艶やかさ、立てば芍薬、座れば牡丹、歩む姿は百合の花、珍魚落雁、羞月閉花、匂いこぼるる艶姿、中国いうなら楊貴妃の姫か、日本で言えば小野小町か、静御前か、私の妻か、というほどの、、、いや、笑うところではござりませぬ。景行天皇、思わず「どうじゃ、ワシの妻になってくれんか?」「はい、よろこんで。」ということになるのでござりませぬが、加古川の女性は日ノ本一慎み深い女性が多い。「恐れ多いことでございます。私のようなものが。否。否。ダメ。ダメ。」と言ったそうでございます。景行天皇ガックリいたしました、「この地は鹿児の地ではない、イナノ地だ。」というので「稲美野」という名前になったとも言われているそうでございます。

一旦大和の国の戻られた景行天皇でございますが、「伊志治。やはり忘れられぬ。あの鹿児の地に住まいいたす印南別嬢を妻に娶りたいものじゃ、来い！」と馬にまたがり加古川までやってまいり「しばらく！しばらく！」と声をかけますと、「あのお方はしつこい！ストーカーかしら？」と思ひながらも恐れ多いと印南別嬢様は小舟にと乗りまして、すーと加古川の中洲のような島の中へ。景行天皇、家来の伊志治が、「あそこだ！しまった！ここから向こうへは、なかなか行くことがでけんわい。なんとかならんものか。」と思っておりますと、白い仔犬が中洲目掛けてワオーンと鳴く。その声を聞きまして印南別嬢様が、中洲の岸のところまでお出になりました。景行天皇が驚かれて、「これ、犬よ。お前は何ゆえさような力を持っておる?」「へえ、ワテあの人に飼われておりますねん。」景行天皇舟にと乗りまして、一世一代のプロポーズをされると、漸く首を縦にお振りになりました印南別嬢様と鹿児の地へとお戻りになりました。

仲睦まじく二人は、この鹿児の地でお暮らしになりまして、お子様があまたお生まれになります。その中で、男の双子がお生まれになりました。上が大碓命（おおうすのみこと）、下が小碓命（おうすのみこと）と申します。この下の小碓命と申しますが、日本武尊（やまとたけるのみこと）に後々なるわけでございます。「タケル。この鹿児の地は風光明媚、この加古川の川の流れのように堂々たる男におなりなさいよ。」と。「母上、しかしながら



この鹿児の地は都に比べますと、何もないところでござりまするが自慢ができませんか?」この時に、印南別嬢様はキッと目をむいたかと思ひますと、「タケル！言葉を慎みなさい！加古川に何もないとはたわけたことを！カツメシがあるではないか!」「い、いや、母上、今は神代の時代でござりまする。」「そうか。かようなものはまだないか。二千年の後にはカツメシができるに違いなかるう。タケル、お前もカツメシのように勝負事には強い男に、そして一本筋を通す加古川のような男になれ。」と育てられたわけでござりまする。タケルが14~15歳になった時、母親の印南別嬢様は病に罹られ、「タケル良いか。そなたは鹿児の地のこの加古川の流れのもと生まれ育ったもの。川というのは高き所から低き所へと必ず流れるようになっており、物の道理の一番のお手本になる。その川の流れの力に逆らおうと、人が自然に勝っていると、驕り高ぶるようなことがあったならば必ず報いを受けようぞ。」と言うて、ことされた。

さて、どこに埋葬をしようかと景行天皇が腕組みをされておりますときに、日本武尊が「父上。母上が生前愛した日岡の山の神様のところへと葬ってくださいませ。」という。「いかにもそうじゃのう。」と加古川の川の下から、喪舟の中に亡骸、櫛の箱、そしてショールのような褶（ひれ）、これを首から巻いて、そのまま葬送の舟は上流へ。このときに日本武尊が堪えきれずに、ワッと号泣をいたしましたならば、一転にわかには掻き曇ったかと思ひや、先ほどまで晴れておりました空がみるみるうちに黒くなり、大風がすーと吹いたかと思ひますと舟が、バーンとひっくり返った、「母上!」その時によりやく母上の形見の品、櫛の入った箱と褶の二品だけを手にとることができ、母上の亡骸は、加古川の中へとお消えになってしまったのでござりまする。

「父上！母上の亡骸が消えてしまいました。」景行天皇は「タケル。そなたの母は加古川の川のそのものになったと考えるがよいぞ。困ったときには加古川の川にたずねよ。母上はそこにいらせられると思ひ。これがそなたの故郷そのものじゃ。」と。

母なる大河というのはこのようなことをいうのでござりませぬか。二つの品だけをば日岡へ納め、褶墓といわれる古墳になったわけでございます。今をさる、二千年以上昔前の、神代の時代のお話でござりまするが、記紀の神話、あるいは播磨国風土記、そして私のウソというものを加味いたしました、このお話になるわけでございます。

母なる川というのは、文字通り我々にとりましては、この加古川ということになるのでござりませぬか。目を凝らして見ましたならば先祖以来の方々が、慈しみのまなこをもって、この川の中から我ら子孫を見守っていてくれているに違いなかるう。という一言をもちまして、私の講談とさせていただきます。

⑥ 基調講演

○ テーマ 「大河の旅のものがたり 流れる川と 人と 時間（とき）がつくる風土」

○ 作家 玉岡 かおる 氏



「大河の旅の物語」ということで、この加古川が流れる数千年の歴史を皆さまと一緒にタイムスリップしたいと思います。今をさかのぼる300年近く前、関ヶ原の戦いで負けはしたけれども、すごい勢力を持っていた大名たちが多く残っていたのが西国でした。それらが再び江戸へ攻め上ってきけることを恐れ、徳川家康は一策を講じます。それは山や川といった天から恵まれたものを防御に使うことで、「箱根の山は天下の嶮」といいますが、さらに怖いものが「越すに越されぬ大井川」と歌われた川でした。西洋の国は外敵から町全体を石の砦の中に入れ守りますが、日本人は川を防御に使っていたわけなんですね。入り鉄砲と出女を防ぐのは川だったと言われております。橋を架けると西国から政府転覆の軍勢を送ってくる、また、人質の西国大名の妻子が逃げ出すという理由で橋を架けませんでした。近代化をする時、橋のない川はお荷物になってしまいました。

そこで近代に入り橋を架けようと進んだ技術を持った外国人技師を招きましたが、その技師たちが腕組みをしたまうってしまいます。「これは川じゃない、滝だ。」と。日本では普段は穏やかな渚（おうな）のような川でも、いったん大雨が降ると濁流が人を飲み込み、家押し流し、般若の顔を見せる川になるわけですね。それでイギリス、フランスから招いた技師たちはお手上げ状態となりましたが、オランダの技師の、大きな土手を築いて海水の浸入を防いだ長い歴史による技術を借りて、ようやく日本の川に橋を架ける工事が行われます。大河の旅、今度は二千年前にイメージをフィードバックしていただきたいと思います。

そこには広いススキ野原と流れる川があるのみです。雨が山のてっぺんに降ります。その雨の雫（しずく）が落ちた場所でこの雫の運命が決まります。山の嶺から北側に落ちた雫は日本海側へと流れ、南へ落ちた雫は瀬戸内海へと運命が分かれるわけですね。川は普通いくつもの県をまたいで流れていると思いますが、兵庫県においては北と南に海を持つため川は県内だけ流れることが特徴になっています。それでは、県内を流れる一級河川加古川が、人の暮らしとどういった関わりを持ってきたか、このお話に触れさせていただき

たいと思います。今、皆さま方の目の前に見えるのは、見渡す限りのススキ野原。おそらく日本人は六千年前ぐらいの縄文時代から平原の傍らにある森の中にせいぜい石を削った石斧を持って住む森の民だった。これは今も私たち日本人の中に脈々と受け継がれている遺伝子の中の記憶なんです。大陸の人たちは狩猟民族であり彼らは文明を持っていました。彼には豊かな森がありませんので、やせた黄色い大地を奪い合いながら生きるために、青銅器なり鉄器なりという進んだ道具を必要としました。



かたや日本人です。日本ではそういった金属器は出土していません。森の中で住んでいるかぎり、木の実がありそれなりに生きていくことができるというスタイル。それが森の文明のやり方でした。大陸の文明は、まず命を奪う道具を持ちその次に文字を持ちました。日本人は言葉で「明日また会いましょうね。」と、それで約束を守るという、口頭の文化を森の中で育んできました。奪い合う文明では、口の約束だけでは済まず、絶対に約束を守らせる必要があります。契約のために文字が必要だったと言われております。こうして大陸の民族は道具と文字を持ち、そして彼らは稲作というものを覚えて日本にやってくる、弥生時代の始まりといわれています。紀元前三千年、渡来人（とらいじん）という言葉でも表されていますが、稲作という方法を持ち瀬戸内海を旅してくるうちに、この播磨の加古川の風景と出会い、早くから渡来の人々が根をおろすこととなります。播磨という字には針の間と言う字が使われています。衣服を縫う針であると同時に田んぼを耕す、鋤や鍬といった金属器を表しており、それを磨くと書いていますので、大陸の人たちがそういう道具を持ってきた土地であると思います。

昨今、日本の弱腰外交と言われておりますけれども、われわれの先祖は、森の中で暮らす温厚な民族だったので、領土の取り合う経験が歴史の中に無いんですね。しかし、残念ながら相手は百戦錬磨の大陸民族です。日本人の穏やかな森の文明がこれから問われる時代になってくる、そんな気がします。

それはさておき、日本人が森と決別する時代がやってきます。森を出た日本人はまずどこに行ったかは、旭堂南海さんのすばらしい講談にも出てきましたが、12代天皇、景行天皇の「妻問い」で、この女の人は川のそばにいた、これがもう象徴しているかと思えます。日本人が森と決別して文化というものを持ったときには川のそばにいた、と播磨国風土記は表しているわけなんですね。また、播磨の女はこの当時において秀でている。と最上級の褒め方しているのですが、川を挟んで当時大和朝廷に対抗するほどの大きな勢力があった。と読むこともできるかと思えます。戦争ではなく結婚をすることにより国を1つにまとめる。こういう作戦もあったわけで、まさに森の民族、戦わない、奪い合わない、殺しあわない、日本人らしい国の拡大の方法だったわけですね。三種の神器を身に付けて正装をした天皇が、この加古川のほとりにやってきて妻問いをする。ところがこの女の人は島に隠れてしまう。で、犬がわんわん吠えた。「この犬誰の犬や。」と聞かれたときに「あ、お姫さんのんですわ。」ってペロっと言ってしまっている。このゆるさというのは、こう播磨人の今日にいたる気質を表しているんじゃないか。誰が来ても外見によって判断しない

わけですね。「自分の方が上や。」ぐらいに思っているこの気質は、戦国時代にも引き継がれます。豊臣秀吉がやって来て、播磨にはいっぱい太閤さんにちなむ地籍があるんですけども、この時も播磨人は景行天皇が来た時と同じ態度で「尾張の水のみ百姓か。俺らのほうが上やな。」と秀吉にたてついてしまうわけなんですね。それによって、播磨というのは歴史の表舞台から遠ざけられてしまう。結局、スターは出ないけれどもここで豊かに過ごすことができるというのを知っている播磨人の気質なんですね。

これは全国からいらしている川のほとりの皆さん方にも共通ではないでしょうか。川のほとりで住んでいると、それなりに生きていけるんですね。川が守ってくれているから。人の生命は水から生まれてきます。みんな母親のおなかの中にある羊水という水の中で生まれてきてるんですね。ですから、水のほとりで生きるというのは、人間にとってごく自然のことで、森を出なければならなかったとき水のあるところをめざしてまずやって来たわけなんですね。そして、平野を耕し、稲を育て、みんなで仲良く暮らそうという森の生活プラス農耕の暮らしというものが始まっていきます。

農耕の暮らしもこれは奪い合う文明ではないんですね。なぜかと言いますと、砂漠の中のメソポタミア文明では、見渡す限り草木一本生えておらず、自分が生きるためには家畜の命を奪い生きなければいけなかったんです。これを森の文明の恵まれた私たちが責めることはできません。私たちがのどかでられたのは川があったからなんですね。

今回の川サミットのテーマは「川はともだち」ですが、川は私たちの命を育み、文化を育て、そして歴史を培ってくれた。これは、まさに母と呼ぶよりほかにないと思います。今日は皆さまと一緒に六千年の時間の旅をしました。大河というのは古い時代の中を流れ、今も私たちの歴史を流れ続けているわけですね。そういう意味でも、もう一度、今流れている水はひよっとしたら太古の縄文時代に山の上に落ちた水が、海へ流れ蒸発し、循環して戻ってきた水かもしれませんので決しておろそかにはできないし、そこに住む魚や昆虫や植物、生きとし生けるものにもおろそかにはできないことと思います。ましてや私たちの命、それからここで六千年を越す長い歴史を育んできた私たちの国土というもの、国土の上には土があるだけじゃないんですね。山があり川がある。これを大事に、どうやって次の時代にバトンタッチするか。それを考えると国際問題、歴史、いろんなことに発展していくんじゃないか、そんな気がします。



⑤ 事例発表

川に関する調査研究を行っている市内の小中学校及び川を通じた市民活動を行っている団体から、事例発表をしていただきました。

(ア)「加古川をより活力のある地域にするために」

加古川交流研究会

商工会議所青年部と市役所若手職員の一部がメンバーとなっている加古川交流研究会では、「子どもの夢かなえ隊」という事業の一つとしてホタルを加古川の川に復活させようという取り組みを行いました。最初は、「ホタルを加古川に復活させるとは、何て大それた取り組みなんだろう。」とっていました。ゲンジボタル、ヘイケボタルの名前ぐらいは聞いたことあっても、どんなところに住んでいるのか全く分かりませんでした。



そんな中、木下先生というホタル博士に出会うことができまして、第1回の勉強会が行われました。加古川をいろいろ調べていくと、両荘グラウンドの右岸あたりに、昔はゲンジボタルが飛んでいた事実があるということが分かりました。

と言うことは、昔は飛んでいたホタルが何らかの原因で絶滅してしまいましたが、ホタルの種さえまいておけば、いずれ花が咲くだろうということで、夢はますます膨らんでいきました。そして、実際に加古川の水を調べて水質汚濁や水環境の保全についても勉強しました。

その翌月に、もう一度木下先生から「加古川でホタルを育てるためには、絶対に加古川水系のところに飛んでいる、住んでいるホタルを使わないとダメだよと、これは遺伝子の攪乱で問題になってしまうから必ず加古川水系でないとダメですよ。」ということをお聞きいただき、探し回ったあげく上荘町にそういう場所があることをつきとめ、わずかながらホタルのお裾分けをいただきました。

そして、僕たちは虫かごの中に発泡スチロールと水ゴケを用い、自然のホタルが住む環境をまねて作ってみました。一週間から二週間でホタルのつがいが死んでしまい、不安になっていったところ、よくよく見ると卵がいっぱい産まれているのが分かったんですね。

その一週間後には、ワンペアのゲンジボタルのつがいから、だいたい400から500匹の幼虫が産まれました。大きさは1ミリから1.5ミリぐらいで、最初はカワニナという貝のミンチをつくって与えていましたが、3ミリぐらいの大きさで育ったころから、貝のまま与えていきました。

いよいよ夏休みに入って、ある程度大きく育った幼虫を参加者の皆さんに配りました。ちょうど夏休みの自由研究として発表したり、ホタルのおもちゃの工作を作ったりというようなことで、子どもたちの夢がますます膨らんでいるんだということが実感できまし

た。参加者の中で一番上手に育てたと思われる方のところに訪問しまして、状況を見せてもらいました。一匹のつがいから400から500匹の幼虫が生まれますが、通常、大きくなるのはわずか数パーセント、2～3匹ぐらいにしかならないといわれている中で、数百匹ほぼ全てが生きているんですね。本当に実力をつけて一生懸命育てたことが分かりました。ここまで育てば、あとは加古川に放流するのみです。

そして放流会です。昨年11月15日に1回目の放流会をしました。その後、今年2月15日に最終の放流会を行いました。あいにくの雨上がりで、かなり増水した状況だったんですが、子供たちと一緒に放流しました。

ところが今年5月24日、ぼちぼち幼虫が陸へあがり成虫になろうとしている時期に大雨が降りました。放流場所付近もかなり増水し水に浸かった状態になって、木下先生からも「全滅しているだろう。」と言われ、半分あきらめていましたが、6月4日に放流場所確認に行ったときに、一匹だけ成虫が飛んでいるのを見つけました。

そこで急遽6月9日の夜に現地集合して鑑賞会を行いました。ただ、鑑賞会当日、せっかくみんなに集まってもらったにもかかわらず、ホタルはなかなか飛びませんでした。しかし、鑑賞会を解散した後に4匹飛んでいるのが確認できました。

このように私たちはホタルの定着に向けて、今もこれからも、引き続き取り組みを行っていきます。私たちがおじいちゃんになったときに、ホタルの飛ぶ加古川の話をお孫たちに話せることを夢見て。

(イ)「加古川河川敷清掃活動」

加古川市立加古川中学校

私たちの学校は、加古川市の中央部に位置し、市内でも一番大きな規模の中学校です。平成20年度から校区一斉清掃で、河川敷の清掃を行うことになりました。平成20年度は台風の接近により校区一斉清掃の行事そのものがなくなりましたが、本年度は天候にも恵まれ、予定通り校区一斉清掃として河川敷の清掃活動を行いました。

今ご覧いただいている清掃活動のビデオですが、加古川中学校から西側に位置する河川敷の映像です。全校生徒の約半数の生徒が上流から下流にかけて清掃しました。増水で流されてきたゴミが堆積していました。マナーの悪い利用者によって、焦がされたテーブルを発見しとても残念でした。集まったゴミはみんな分別し、加古川市環境部の協力で回収していただき、また、環境政策課の協力を得て、生徒会役員の手で水質調査を行いました。

調査は、パックテストでCODの値を測定しました。今回は加古川本流2ヶ所の水と、学校の近くを流れる泊川の水とを比較してみました。



CODとは化学的酸素要求量のことで、これは採水した水の酸素消費量を薬品により調べる方法で、パックに入れた採水と薬品を混ぜ、標準色と比べているものです。

加古川にはいくつかの堰がありますが、堰の下流側の海水と混ざっている水と、堰の上流側になる学校のすぐ横を流れる泊川の水を採取しています。パックに水を入れて5～6回振って、5分後に標準色の表と比較します。

今回の調査は簡易なテストなので、正確な数値を確認することはできませんでしたが、加古川本流の水が場所によって水質に違いがあることや、生活排水が流れ込む泊川の汚染度が高いことがわかりました。数値が高いと、酸素消費量が多く汚染度が高いことを示しています。当日は気温も高く採水場所の水は岸辺であることから、条件は少し悪いと思われます。蒸留水にオレンジジュース、牛乳を入れた実験も体験しました。たった1滴のジュースや牛乳で、水質の汚染度が上がることがわかりました。

加古川市の環境政策課からいただいた資料によると、公表されている加古川の水質は加古川市の北部のかなり上流域で測定されたもので、今回の調査は河川敷清掃場所でCODという調査を行いました。環境基準を達成しているそうです。

しかし、私たちの住んでいる場所の水は、かなり下流で支流からの生活排水等が流れ込み、数値は悪くなっていると考えられます。加古川中学校では、この校区一斉清掃のほかに、中学校2年生のトライやるウィークでも河川清掃活動を行っています。事業所としてお世話になっているNPOのエコ炭銀行では、竹炭を活用し、地域の河川浄化活動に取り組まれています。トライやる生は、竹炭づくりと河川敷の清掃で環境学習を体験します。

この場所は、COD調査で汚染度の高かった泊川の下流域になり、多くのゴミが集まっています。ここは、加古川中学校の北側を流れる泊川です。生活排水が流れ込み、川の周辺に放置されたゴミが浮かんでいます。透明度もかなり悪いです。下流で加古川の本流と合流して瀬戸内海に流れ込んでいきます。大きな雨が降ると川の底に溜まっているゴミは、一気に瀬戸内海に流れ込んでいきます。ペットボトルなど軽いゴミがたくさん川べりに残ります。

加古川は私たち加古川市民にとって、生活や工業用水として、また防災拠点として、重要な役割をはたしています。河川敷周辺には多くの施設があり、市民の憩いの場やスポーツが楽しめる場所となっています。今回調べてみて、多くの支流が流れ込む加古川の汚染は、自分たちが思っていた以上でした。加古川を守るために、美しい川にするために、自分たちにできることは何だろうと考える機会になりました。私たちは自分自身の生活を見直し、水の汚染を防ぎたいと思います。さらにエコ炭などを利用し、身近にある泊川などを美しくしていきたいと思います。

私たちはこの加古川を守るために清掃活動に取り組むこと。環境保全について学ぶこと。日常生活を見直すこと。加古川を守るために呼びかけること。加古川の上流から下流の住民が協力して美しい加古川を守り続けていきたいと思っています。また、加古川へ流れ込む支流の河川の汚染防止に向けて多くの人々の協力も必要だと思います。

(ウ)「それいけ！日野っ子たんけんたい ～杉原川にアタック！！～」

西脇市立日野小学校

西脇市立日野小学校の総合的な学習の時間に、3年生が66名で実施しました杉原川での環境体験学習について発表します。

川で自由に五感を使って遊ぶという活動で、子供たちはたくさんの生き物を見つけると同時にゴミも見つけ、いつも橋の上から見るときれいな川ですが、本当はどうかという疑問を持ちました。そこで、「川のきれいさを調べたい。」「それからこの川の水はどんなことに使われているんだろう。」と思うようになりました。そして、実際に川の中に入って、エビや魚などたくさんの生き物を捕まえ、また、たくさんのゴミも拾いましたが、ゴミを取るのもなんだかうれしかったみたいです。

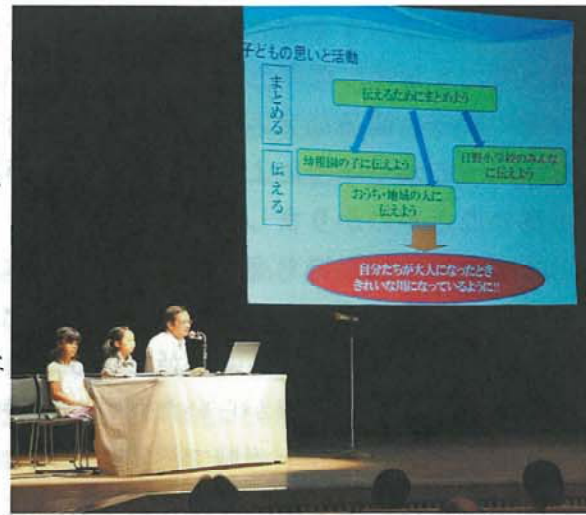
子供たちは、水が透き通っているかどうか、ゴミがあるかないか、臭うか、なめてどんな味がするか、自分なりの基準で川の水を調べてみました。ところが、子どもによって結果がまちまちになりましたので、環境研究センターの小川さんをお呼びし、指標になる水生生物を調べて川のきれいさを調べました。その結果、杉原川の水は少し汚いと分かり、子どもたちはちょっとショックを受けたみたいでした。

それで、子どもたちは、「同じ川でももっときれいな上流を調べてみたい。」、また、「昔は川で野菜を洗ってたんだって。ひょっとして昔は川きれいだったんじゃないか。」と考え、ペットボトルに水を汲んで透明かどうかできれいさを調べた子どもがあり、また、ゴーグルをかけて、直接川に顔をっこんで調べた子どももいました。

一方、昔の川がきれいだったかどうかを、おうちの人や近所の方にも聞き、「昔は川をプールにしていたよ。」「もちろん野菜も洗っていたよ。」「釣った魚その場で食べていたよ。」という話で「ああ、昔の水はきれいだったんだ。」ということを知りました。



上流の水の調査については、杉原谷小学校の子どもたちと一緒に探検しました。杉原谷まで行くと日野にはいないサワガニを見つけ、上流がきれいだということが分かり、子どもたちは「少し汚い杉原川は嫌だ。自分たちが大人になったとき、きれいな川になってほしい。」と思うようになり、川のゴミ拾いをしました。さらに、「拾うだけじゃだめだ。捨てないようにみんなに言わないといけない。」ということで、みんなで絵を書いて10枚の看板を作った結果、ゴミは減ったようです。そのことを私がそれ子どもたちに伝えようと、「減っただけやったらあかんで先生、ゼロにならなあかん。」と、喜びながらも、もっと何かしたいという気持ちになったみたいです。



(エ)「生命かがやけ東条川 ～身近な川から環境を考える～」

加東市立東条東小学校



僕たちの学校の横には、加古川の支流である東条川が流れています。私たちは1年生の頃から川に親しみ、水生生物について調べたり水質検査をしたりして学習をしてきました。

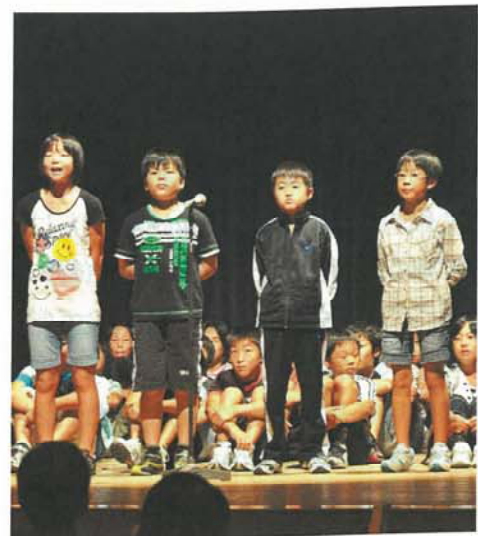
今日はそのことについて発表したいと思います。私たちの学校の全校児童は121名です。1年生は2クラス、他の学年は1クラスの小さな学校で全校生徒と保護者、地域の方と一緒に川のクリーン

活動を行うなど川をきれいにしていく活動をしています。まず1年生と、2年生の時には東条川に棲む生き物をつかまえに行きました。学校で名前を調べるとカワゲラ、トビケラ、カゲロウ、ヨシノボリなどいろいろな水生生物について知ることができました。初めて川に入ったとき水は冷たく、石はヌルヌルしていて転んでしまいました。でも、川で遊べてとても面白かったです。

3年生は東条川でみつけた水生生物を詳しく調べたり、一年間をとおして川の様子を調べたりしました。秋には「人と自然の博物館」の先生と一緒に川の学習をしました。トビケラは流れの遅いところに住み、網を張って小さな水生生物を食べますが、きれいな川で見られませんか。カワゲラはきれいな川の中流に生息し、小さな虫や微生物などを食べて生活しています。ヒラタドROMシは少し汚い水に生息し、石にくっついている藻を食べ生活しています。カゲロウは流れの遅い場所の石の裏で、藻やプランクトンを食べ、きれいな水のところに多く生息しています。3年生では夏に水生生物の採集をして、秋には夏の東条川とどのように違っているかについて調べました。分かったことは、トビケラ、カワゲラ、カゲロウ、ヒラタドROMシなどの、たくさんの水生生物が生息していることや、エサが多くなる秋にたくさん成長するというものでした。学習の最後には東条川の模型を作りました。

次に4年生です。東条川の上流から下流までの水質検査を行いました。また、先輩たちのホタルを増やす取組みを引き継いで、ホタルのことについても学習を進めました。他にも、環境を守るための取組みとして、夏休みに米のとぎ汁や調味料を流さないことを目標に生活をし、ホタルを増やすためにビオトープの掃除をしました。まず、僕たちは東条川がきれいな川なのか、汚い川なのかを調べました。東条川にはいろいろな種類の水生生物が生息していましたが、その中でもきれいな水に住む水生生物や、少し汚い水に住む水生生物が多いということが分かりました。その結果、東条川は少しきれいな川だということが分かりました。

また、さらに水質を調べた結果、東条川はホタルが何とか棲める川だということが分かりましたので、ホタルのことについても詳しく調べていきました。ホタルは6月に卵を産み、7月に孵化して幼虫になりカワニナを食べます。天敵はおもにヒルです。



翌年の4月、土に潜ってさなぎになり、5月上旬に羽化し交尾をするために光ります。これらのことを調べるにあたって地域に住むホタル研究家の西山さんにお世話になりました。ホタルの鑑賞会は、ホタルの光が星みたいで、生きているプラネタリウムのようなものでした。また、先輩たちに引き続き、僕たちもホタルの数について調べた結果、この表のようになりました。自然が多い地区ほど、やはりホタルの数は多かったです。そこで川をきれいにし、ホタルをもっと増やしていくために、夏休みに二つの取組みをしました。一つ目は米のとぎ汁を流さないこと、この取組みはクラス全体の60%ができました。

二つ目は調味料を流さないこと。この取組みはクラス全体の63%ができました。毎日することは難しいけれど、これからも続けていくことが大事だと思います。また、ホタルを増やしていくために、東条川につながるビオトープの掃除をしました。缶・ビニール袋などを拾って、一生懸命に掃除をすると川の流れも良くなりました。ビオトープ掃除の後には、魚やホタルの幼虫などを放流しました。ホタルを守り続けるには、掃除を毎年続けなければならないなあと思いました。

私たちは今まで東条川の学習をしてきました。その学習をしてきた中でこの美しい環境を守るために皆さんに伝えたいことと、お願いがあります。米のとぎ汁や食べものの残りが調味料など下水に流してしまうと、下水処理場で水をきれいにすることが大変で、もとのきれいな水に戻すことが難しくなります。これからは、食べ物を残さない、水をできるだけ汚さずに節水する、この二つのことを守っていくことで自分たちの住んでいる地域や皆さんの住んでいるところの川の環境を守ることができると思います。「みんなできれいな川を未来に残していきましょう。」



⑦ サミット式典

会長である樽本庄一加古川市長が「第19回全国川サミット in 加古川 共同宣言」を読み上げ、参加自治体及び加古川流域自治体の代表者とともに川の恵みを後世に引き継ぐことを宣言しました。

続いて、会長から、次期開催地の新潟県長岡市長にサミット旗が手渡されました。



加古川市立加古川中学校の生徒による
第19回全国川サミット in 加古川 共同宣言



次年度開催地の新潟県長岡市長にサミット旗が引き渡されました

第19回全国川サミット in 加古川

共同宣言

一級河川加古川はその源を、兵庫県但馬地域と播磨地域の境に連なる山地に位置する粟鹿山に発し、ゆるやかに播磨平野を流れ、瀬戸内海へと注ぐ兵庫県下最大の河川です。

「第19回全国川サミット in 加古川」は、市制施行60周年を迎えたここ加古川に集い、「川はともだち ～未来につなぐメッセージ～」をテーマに開催しました。

先人から受け継いだ川のもつ素晴らしさや大切さを見つめ直し、これからも親しめる川として次の世代に引き継ぎ、川と共生していくことを共に誓い、ここに宣言します。

- 1 わたしたちは、清流と呼ぶにふさわしい川を守るため、豊かな自然の保全に取り組めます。
- 1 わたしたちは、水害から生命や財産を守るため、災害に強い川づくりに取り組めます。
- 1 わたしたちは、生活にうるおいとやすらぎのある、川を生かしたまちづくりに取り組めます。
- 1 わたしたちは、流域住民と行政が互いに力を合わせ、川をより身近に感じる地域づくりに取り組めます。
- 1 わたしたちは、川を愛する自治体の交流を深め、川の未来を語り合い、川サミットの輪を広げる活動に取り組めます。

平成22年9月26日

第19回全国川サミット in 加古川参加者一同

⑧ 展示等 全国川サミット in 加古川

加古川プラザホテルと加古川市民会館において、参加自治体及び加古川流域自治体の紹介コーナーを設置しました。

また、加古川市民会館では国土交通省・兵庫県の加古川流域パネル展、参加自治体及び加古川流域自治体の物産販売が行われました。



← 参加自治体紹介パネル展
(会場：加古川プラザホテル)



参加自治体紹介パネル展 →
(会場：加古川市民会館)



← 河川環境保護団体パネル展



国土交通省・兵庫県 加古川流域パネル展 →



← 昼食ブース
(かつめし、焼きそば販売)

→ 物産展ブース
(参加自治体の物産販売)



県内マスコットキャラクター集合！！

左から、いなぼう(猪名川町)、ぼっくりん(高砂市)、デミーちゃん&かつっん(加古川市)、はばタン(兵庫県)

Ⅲ 第19回全国川サミット in 加古川を振り返って

今回のサミットでは、“川はともだち ～ 未来につなぐメッセージ ～”のテーマのもと、さまざまな企画が行われました。

首長サミットでは、参加自治体の代表が川を生きかしたまちづくりについて、熱い思いを語り合いました。絵画・標語コンクール表彰式では川に親しむ内容の優秀な作品が表彰されました。記念講談を行った旭堂南海氏からは、記紀・風土記と市内の文化財に残る、加古川にまつわる神話を通して、母なる川「加古川」と神代の時代からその地に住まう人との歴史を紐解き、加古川のほとりに生きる私たちの郷土愛を醸成する楽しいご講談をいただきました。また、玉岡かおる氏は、川が育む森の歴史と砂漠における大陸の歴史との対比により、先祖以来、私たち日本人が水と自然に恵まれた歴史・文化を享受していることを再確認し、太古より連綿と続く水の循環を見つめ直し、次代に引継ぐ大切さを私たちに示してくださいました。

さらに、事例発表では小中学校の児童生徒や官民交流を図る団体が、身近な自然や川における生物・水質調査や河川環境保全活動に取り組んだ結果、興味深い成果を披露し独創的で行政に頼らない活動が地域に根ざしていることが明らかになりました。

第4回川サミットを開催した平成7年から15年経過する今も、加古川市においては大勢の市民参加による河川敷を利用した川にちなんだイベントが行われており、川サミット精神が当地に息づいていることが確認できたと思います。

地方自治体における財政状況厳しい中、新潟県長岡市におかれましては次回サミットの主催を表明していただきありがとうございます。

私たち第19回全国川サミット in 加古川参加自治体は、今サミットにおいて採択した共同宣言の実現にあたり、今後も情報交換と連携を深めてまいります。